

## 伝統的経学の現代的意義

林 慶彰

中央研究院中国文哲研究所（台湾）

1948年台湾生まれ。東呉大学中国文学研究所において修士号と国家文学博士号を取得。現在は台湾の中央研究院・文哲研究所の研究員（教授）であり、東呉大学中国文学系の教授を兼任する。明代・清代の経学、日本漢学、図書文献学を主たる専門としている。専著として『明代経学研究論集』『清初的群經辨偽學』『圖書文献學研究論集』など10余冊、主編として『経学研究論著目録』『日本研究経学論著目録』など30余冊があり、学術論文は100余篇にのぼる。また定期刊行『国際漢学研究』などの主編も担当しており、東アジアを代表する経学研究者である。

### 前 言

世界の多数歴史ある民族は、それぞれ自分の經典を持っている。例えばインドの『ヴェーダ』、ギリシャのホメロス、ヘブライの『旧約聖書』、『新約聖書』等である。だが中国の經典のように形成プロセスが非常に複雑で種類も多く、さらに学術・政治・社会の長い歴史を網羅するものとなると、実にまれに見る現象だと言わざるを得ない。

漢の文・景帝時代から經典は次第に官学の地位を取得するようになり、武帝の時、儒家の学術のみを尊ぶようになって以来、經典は出世の道具となる。それ以降、清の徳宗光緒三十一年（1905）年の科挙廃止まで、総計二千余年間にわたり経書は知識人必読書であったばかりか、政治実践の準則、社会生活の規範となり、ひいては文学・哲学の発展の方向に影響を与えた。経書がこのような絶大な影響力を有していたため、これまで学者が各種経書にほどこした註釈は、おびただしい数にのぼる。この経書と歴代各種の註釈が複雑な学問構造を生み出すこととなった。この学問を経学と呼ぶ。

清末、西洋文化が陸続と伝来してから、西洋の学問知識を備えた知識人が日増しに増加していき、彼らは当時の環境で発揮しうる伝統的経学の働きに対し、次第に懐疑的になっていった。古史辨学派は経書を信用しがたい歴史史料と見なし<sup>1</sup>、経学はすでに終結したとまで宣言する学者もいた<sup>2</sup>。一九四九年新中国成立以後、経学は学科分類から外され、文化大革命では経

学を「封建的害毒」と見なし、経学研究者の中には家財没収に近い扱いを受けた者もいた。文化大革命以後、経学は毒蛇猛獣とは見なされなくなったものの、経学の生命力は大いに損なわれ、氣息奄々の状態である。

中国の政治・社会・学術を二千年余り主導してきた経学は、寿命を終えさせるべきなのか、それともそこには依然として現代的意義があるのだろうか？これは中国の伝統的学術の発展に関心を寄せる学者が思考すべき問題である。この数十年來経学の損害から、経学が内包するものを理解する人が寥々たるものになったことも理解できる。経学の現代的意義について検討を始める前に、まず経学の形成と意味を述べておかねばならない。

### 一、経書の形成過程

経の元来の字形は「罍」<sup>けい</sup>、すなわち絹糸である。後に「糸」の字が偏旁に加わり、「経」という字になった。許慎『説文解字』に曰く、「経、織ること縦糸也」とあり、「経」は布を織るときの直線であることを指摘する。布を織るとき、縦糸は固定不動で、横糸は左右を行き交う。縦・横糸が組み合うことで織物が出来上がる。経線は固定不動であるから、経の字はそこで「恒常」、「不変」の意味がうまれる。儒家の典籍は、本来先人の知恵の結晶であり、さらに孔子の珊定（余分な字句を削り改めること）を経て不変の真理を含むから、「経」と呼ばれるのである。

儒家の經典には十三種あり、「十三経」という。十

三経は一千余年の時を経て完成されていったものだ。最初に出現した書籍は「詩」,「書」,「易」であり、西周時代に続々と現れたが、作者はわからず経の名もない。孔子は学生に教えるとき教材を編んだが、後人は孔子の「微言大義」がその中にあると考えた。孔子が晩年改編した魯国の歴史が、「春秋」という。このほか、当時貴族の儀礼の記録が「礼」、楽章を記録した書が「楽」である。よって先秦の書籍で、例えば「莊子・天運編」,「礼記・経解編」が、「詩」,「書」,「礼」,「楽」,「易」,「春秋」を六経と呼んでいる。

戦国時代、儒学者は古い經典に註釈を付け、これら注解が「伝」或いは「記」と呼ばれた。例えば「易」には「易伝」,「春秋」には「公羊伝」,「穀梁伝」と「左氏伝」がある。「礼」は多くの編章から成るが、儒学者はこれらにも解釈をほどこし、それらは「伝」或いは「記」と呼ばれる。後にあわせて「礼記」となった。このほか、戦国時代に儒学者が完成させた職官の書を「周官」または「周礼」という。いわゆる「三伝」,「三礼」もほぼ完成した。

孔子と孟子の弟子は、師の言論を編集して書を著した。孔子の言論を編集した書が「論語」で、孟子の言論を編集した書が「孟子」である。「論語」と「孟子」は先秦時代にすでに書物になっていたが、経には崇められてはなかった。このほか先秦時代にすでに書籍になっていたものとして、孝道を説いた「孝経」がある。これには経の名が付くが、経書の一つにはなっていない。

これらの書は戦国時期におおよそ書籍になっているが、漢の武帝の時でもわずか五経博士を立てたのみだった。いわゆる五経とは「詩」,「書」,「礼」,「易」,「春秋」を指し、「楽」は入っていない。以上から西漢前期に「楽経」はすでに失われ、六経は五経を残すのみとなった。東漢時代の「七経」とは、「五経」のほかに「論語」と「孝経」を加えたものである。

唐代には「九経」という言い方がみえるが、どれを指すのであろうか。説は様々で、一説には「易」,「書」,「詩」,「周礼」,「儀礼」,「礼記」,「春秋左氏伝」,「公羊伝」,「穀梁伝」。他の一説では、「易」,「書」,「詩」,「周礼」,「儀礼」,「礼記」,「春秋」,「論語」,「孝経」を指す。唐の文宗開成二(837)年、石碑に十二経が彫られ長安国子監の門前に立てられた。その名を「開成石経」という<sup>3</sup>。この十二経とは、「易」,「書」,「詩」,「周礼」,「儀礼」,「礼記」,「春秋左氏伝」,「公羊伝」,「穀梁伝」,「論語」,「孝経」,「爾雅」である。

南宋初年、朱熹が「孟子」を高く評価して、「論語」,「大学」,「中庸」と合わせて「四書」と呼び、「孟子」

も経書の一つとなった。当時「十三経」の名はまだなかったが、経書はすでに十三種に増えていた。明の世宗嘉靖年間に閩中御史李元陽が「十三経注疏」を版木に彫り<sup>4</sup>、「十三経」の名はここで確定した。

## 二、経書の意味及びその歴代の作用

十三経は千余年の時間を経て次第に完成されていったものだが、経書の歴代の作用を理解し、以後経書を研究する意義を理解していくために、まず経書の内容を理解しなくてはならない。近代古史辨学者はどの経書も古代歴史史料とみなすが、それは一つの偏見に過ぎない。ここで先に各経書の内容をそれぞれ述べる。

1. 「周易」。六十四卦、卦辞、爻辞の組み合わせから成る。のちにその卦と卦、爻辞を解釈した象伝、象伝や、繫辞、文言、説卦、序卦、雜卦等解釈性を帯びる文字が現れ「十翼」または「易伝」と呼ばれた。「周易」の作者は不詳だが、古人に「易」は伏羲、文王、孔子三聖を経たという説もある。全体では、宇宙の生成変化を講述するほか、立身処世の道理に紙幅を多く費やしている。宋代に現れた「河図」,「洛書」,「太極図」はすべて「周易」から生まれたもので、儒家の宇宙論の不足を補っている。

2. 「尚書」。現存五十八編、うち二十五編は晋人による偽作。三十三編の真編のうち、大部分は古代の公文と政治、地理方面の著作で、中でも「禹貢」は古代地理学の名作である。明末清初学者は経世致用のために、「禹貢」をとりわけ重視した。「洪範」は治国の道理を多く説いており、しばしば政治実践の指導方針となった。偽編の「大禹謨」の中にみえる十六字、「人心惟危、道心惟微。惟精惟一、允執厥中」(「人心惟れ危うく、道心惟れ微なり。惟れ精惟れ一、允に厥の中を執る」)は、「十六字心伝」と呼ばれ、宋明学者が道統を論じる理論的根拠とされた。

3. 「詩経」。「風」,「雅」,「頌」の三大部分に分けられ、総計三百五編ある。孔子が教材として編んだものであり、中国古代文学の源泉である。後人が著した「毛詩序」は、中国の文学批評面に甚大な影響を与えた。

4. 「周礼」。周代の理想的政府設計の書、周公の作と伝えられる。天、地、春、夏、秋、冬官に分けられ、冬官には行政人員の職掌が記される。冬官が亡失したため、後人は「考工記」で補充した。王安石は「周礼」に基づいて政治改革を推進した。中華民国の熊十力はその著「論六経」で、「周礼」は新中国の土地改革の助けとなると述べた<sup>5</sup>。

5. 『儀礼』。周代士大夫階級の政、冠婚葬祭の儀礼を記載したもの。現存十七編。歴代王朝は典礼を制定するが、多くは『儀礼』に依拠する。中でも「喪服」は影響力が最大の一編。

6. 『礼記』。先秦から漢代儒学者が礼を説明した論文集、四十九編。そのうち「礼運編」の大理想は清末に多大な影響を及ぼした。「学記」は中国古代教育の思想の総体。宋代朱子が「中庸」、「大学」二編を『論語』、『孟子』と合わせて「四書」と称し、学童必読の教科書になった。

7. 『春秋左伝』。左丘明の作と伝えられ、後に『春秋』を解釈する書の一つになる。『左伝』は歴史的事実の叙述を重視した。人物描写は、鮮明で生き生きとして真に迫っている。戦争描写では、入り組んだシーンを描くことに長けていた。後の古文や小説に与えた影響は大きい。

8. 『公羊伝』。戦国時代公羊家の伝で、後に『春秋』三伝の一つになる。『公羊伝』は問答形式を用いて、『春秋』経文に一字一字解析をしている。その中の大一統の思想と夷夏関係論は中国古代政治思想に相当の影響をもった。

9. 『穀梁伝』。戦国時代穀梁家の伝。これも『春秋』三伝の一つ。『穀梁伝』の体裁は『公羊伝』に近く、こちらも問答形式で『春秋』経文を解釈する。『穀梁伝』は『春秋』経文の解釈が最も妥当であることから、学者は「『穀梁』は経に長けている」と評した<sup>6</sup>。その中の「正名」思想は、孔子の正名思想の継承と発展と見なされる。

10. 『論語』。孔子が時人、弟子たちと交わした談話の彙編、計二十編。中国古代知識人の必読書であり、儒家思想研究の最重要資料。さらには道徳修養の手引きでもある。さらに多くの指導原則が記される。南宋の時、朱子は『孟子』、『大学』、『中庸』と合わせて「四書」と称した。

11. 『孝経』。戦国時代の作品。古代の最も系統的に孝を論じた文章で、全十八章に分かれる。中国古代の倫理思想、とりわけ父と子、君子と臣下の関係に大きな影響を及ぼした。

12. 『爾雅』。古代訓詁資料の彙編、また中国最古の字句意義を解釈した辞典。古代漢語語彙学の重要資料である。各種事物に対する訓釈は、人間関係から天文地理まで、建築器物から動植物に至るまで、古代文化発展を理解する上で重要な証拠資料である。

13. 『孟子』。孟子が時人、弟子たちと交わした言行記録。全七編、毎編上下に分かれる。孟子は孔子思想の最良の継承者である。よって『孟子』は儒家思想を

研究する上で不可欠の書になった。『孟子』はもともと経には入らなかったが、南宋に至り朱子の時、『論語』、『大学』、『中庸』と合わせて「四書」と称され、その地位は次第に高まり、十三経の一つにもなった。

以上経学内容に関して簡単な紹介をしたが、中国経典の源泉の複雑性を見ることができたといえよう。経典作者、作成時代に関わる考証は現在に至るもなお最も基礎的な作業の一つである。歴代の新旧学問の論争も、しばしば経学の真偽の考証から着手してきた。例えば宋代学者の漢学への批判、明末清初の原典回帰運動<sup>7</sup>、清末民初の今古文の論争などすべてがそうである。

また以上の記述から、経典内容の豊富性も発見することが可能である。例えば現代の学科区分に従えば、『周易』、『論語』、『孟子』は哲学に、『孝経』は倫理学、『尚書』、『左伝』、『公羊伝』、『穀梁伝』は古代史、『周礼』は政治学、『儀礼』、『礼記』は社会学、『詩経』は文学、『爾雅』は言語文字学と分けられる。これほどまでに豊富な内容は、中国文化の大宝庫と言っても過言ではないだろう。

### 三、伝統的経学の現代的作用

ある経学研究者が述べるところによれば、現在為すべきことは、二千年来の栄光ある歴史を追想することでも、人々に必読を求めることでも、また経学を信頼薄い資料として辨偽の手法で細かく弁別することでも、更には経学を封建害毒と見なしてきれいさっぱり捨て去ることでもない。なすべきことは、最も客観的かつ純粋な態度で改めて経書の内容をかえりみ、記載事項が現代社会の必要性和符合するかどうか見極めることだ。私は伝統的経学は現代社会において以下に記するような効用があると考えている。

#### (一) 中国文化を理解する媒介

高明氏は次のように言う。「中国文化は儒家思想を主流とし、また儒家思想の基礎は経学にある。経学を治めなければ、儒家思想を理解することはできない。中国文化を知るためには必ず経学研究から始めねばならない。」<sup>8</sup> 儒家思想を理解するためにはまず先に経学を研究するというだけではなく、たとえ中国古典文学を理解するときでも、経学に対する最低限度の認識を持たねばなるまい。陳榮捷氏は王陽明の『伝習録』「以て九族を親とす」を注釈して言う。「九族とは、『尚書』欧陽（欧陽修、1007-1072、『毛詩本義』）が言うところでは、父族四、母族三、妻族二である」<sup>9</sup> いわゆる

「尚書」欧陽とは、漢代欧陽氏の「尚書」を指し、欧陽修ではない。また欧陽修に「尚書」に関する著作はない。陳氏のいう「毛詩正義」もまた「尚書」欧陽のものではない。経書の変遷に暗いと、王陽明思想に対する理解を誤ることになる。

もう一つの例だが、湯頭祖「牡丹亭」の第五幕「延師」で、杜宝延が陳最良に依頼し娘・杜麗娘に家庭教師をする描写がある。陳最良は彼女に「関雎篇」の「関関たる雎鳩は、河の洲に在り」を解釈するとき、これを表現法の一つ“興”と理解し、次句の「窈窕たる淑女は、君子の好逑」が生まれたと説明した。陳最良は、「続く窈窕淑女とは幽閑な女性であり、君子がよろしく彼女を求めるのだ」と話した。このような解釈は杜麗娘の心を開くことになる。だが彼女は反対に、「注に従って解釈すれば学生はおのずとわかります」と言い、内心の喜びを隠した。学者の中には、杜麗娘の言葉を根拠に、陳最良は注に拠って詩を解釈できただけで、思想は陳腐だという者もいる。実際には「注」とは朱子「詩集伝」を指し、皇后の徳を説いたものでもある。陳最良の説は全くの独創的新解釈であったが、学者の「詩経」注解に対する理解不足から、先進的思想をもつ陳最良は陳腐の象徴へと誤解されたのだ。またこのような解説から、湯頭祖の陳最良を描いた意図も歪曲されたことになる。

以上の例は、経学を理解しなければ中国学術に対する正確な理解が困難である証左である。

## (二) 人生の教養手引き

中国経書に記載される多くは人間の相互関係であり、中には少なからず時宜に適さない言葉もあるかもしれないが、大部分において二千年の試練に耐え、なお常に新しい価値を有している。教養や立志を語るのならば、現在は各種の書がそろっているのに、なぜこれら経典から材料を探さねばならないのかと思う人もいるだろう。だが経書の言葉は二千余年の歴史を経てなお学者は読解を深めることをやめない。なぜなら経書は前賢の智恵で溢れているためだ。学者は閲読する中から、ゆっくりと黙していき、次第に教養の境地にのぼりつめる。

【周易】は謙遜の徳を十分崇めたもので、「謙卦」の卦象（「山は地下に在り」）は、謙虚の意味を表す。卦辞、「謙、亨」は人柄は穏やかで、順風満帆をいう。「九三」の爻辞では「勞謙、君子終有り」とあり、功労がありまた謙虚な君子は天寿を全うできると言っているのだ。「象辞」では「勞謙君子、万民服す也」とあり、功労あり謙虚な君子は万民が帰順することを説く。「謙

卦」は謙虚さの重要性を強調しようとしたといえる。「繫辞上」では、「二人心を同じくして、その利金を断つ」と述べ、二人が一致協力すれば万事順調にいくと説いた。これは団結の重要性を強調しようとした。<sup>10</sup>

【論語】、「孟子」二書に関して、人間の教養と相互関係を最重要視した。学習の過程で、もし孔、孟の懇ろな教えを常に復習すれば、すべての人が聖人や賢人になれるとはいえないまでも、長年受けた薫陶から、公明正大な人格が生まれるのも何ら困難なことではないに違いない。台湾では最近数十年来、高等学校の課程に常に「中国文化基礎教材」の課目が設けられてきた。「論語」、「孟子」、「大学」、「中庸」をそれぞれ選読するが、これは非常に正しい方法である。

## (三) 指導者の指導原則

中国の経典は専門的に指導統治を述べた書ではない。しかし中には多くの指導者の指導原則が書かれており、為政者や企業指導者が参考とするに十分価値がある。特に「論語」は孔子が当の為政者や弟子に与えた指示であり、二千余年を経てもなお消滅させることは不可能なほどの価値を有している。これがすなわち「『論語』の一部分を読めば天下を治めることができる」<sup>11</sup>説が存在する理由である。

政の原則に関して、孔子はかつて「名を正す」の概念を提示した。孔子は「名正さずば、則言順ならず。言順ならずば、則事成らず」と言い、成功の先決条件は「正名」（名分を正すこと）だと考えた。孔子がこのように考えたのは、当時、君子が君子でなく、臣下が臣下でなく、父が父でなく、子が子でないという秩序が乱れた時代であると感じ、名分を正して以降、君子は君子、臣下は臣下、父は父、子は子となり、政治の実践はようやく軌道に乗ることができたためだ。今日、政府指導部門、企業の管理機構を問わず、孔子の「正名」概念は依然として最も重要な指導原則である。孔子はまた、「政とは正なり。子は師いるに正を以てせば、誰か敢えて不正ならんや。」（「論語・顔淵」）。と述べるが、これは指導者は公正無私かつ自己に厳しくあれば、臣下もまた分不相応な考えを抱こうとはしないと説いている。このような指導者の徳の影響力は、たとえ現代の政治や企業の中にあっても、依然多くの人に受け入れられるものだ。

【論語】はこのように優れた指導原則を備えており、日本でもまた幅広く企業家の愛顧を受けている。だが中国或いは台湾ではどうであろうか？一九八八年九月、台北で「青年企業家講習会」が開かれ、学者や専門家を招き特定のテーマについて講演してもらった。計二

十の講演だったが、議題はすべて西洋的商工業に関する管理或いは社会問題についてであり、伝統儒家の思想に触れる部分は皆無だった。指導の宝典ともいうべき『論語』などが冷遇され、一方、西洋の管理学をその基準と崇めるとは、このような観念は修正される必要があるだろう。

### 終わりに

以上のように、私個人が中国文化の薫陶の下で成長したからでも、中国伝統的経学の研究者であるからでもなく、経学はこれほどまで深奥で比類のない価値を備えているといえる。我々は純粋な観点から経学を観察し、すると伝統的な中国の学術が有する経・史・子・集の四大部分のうち、経学はその一つを位置を占め、残り三者もまた多かれ少なかれ経学の影響を受けていることに気付く。よって中国文化の豊富さ深遠さを理解するためには、経学を理解しなければうわべのみしか知ることができないのだ。

経学は過去二千年間のように、学術、政治、社会の指導思想にはなりえないであろうが、経書は古代の聖人や賢者の智恵の結晶であり、二千年の歳月を経ても依然智恵の光を放っている。各経書に載録された道徳や教養の規範は、現代の為政者、企業家の指導原則と見なすこともでき、その広範な効用を現代人はいかにして巧みに運用発揮できるのかを考えていくべきだろう。

以上挙げたいくつかの視点から経学を観察してこそ、その歴史が長くなおかつ新しい価値を発掘することができる。経学が相変わらず現代社会に対して多くの価値を有していることから、経学研究者として最も差し迫った仕事は、社会大衆が受け入れることのできる普遍的方法を用いて経学の現代価値を広めることに他ならず、経学が次第に現代社会に埋没していくのを黙って見ていることではないと思われる。

- 1 古史辨学派の経学に対する観点について、王汎森『古史辨運動の興起』（台北：允晨文化公司1987年4月）、彭明輝『大思想与現代中国史学的發展』（台北：台湾商務印書館1991年9月）。
- 2 湯志鈞「近代経学的發展与消亡」『歴史研究』1985年3期（1985年6月）46-58頁、「五四運動和経学的終結」『中国哲学』第3輯（北京：三聯書局1980年8月）287-297頁。
- 3 唐石経に関して、大成「談唐石経」『孔孟月刊』9巻12期（1971年8月）、18-22頁。
- 4 屈萬里「十三経注疎板刻述略」216-236頁参照（『書備論学集』台北：台湾開明書店1969年3月所収）。
- 5 拙著「当代新儒家的『周礼』研究及其時代意義」105-129頁（劉述先主編『当代儒学論集：挑戰与回応』台北：中央研究院中国文哲研究所1995年12月所収）を参照されたい。
- 6 鄭玄「六芸論」で次のように述べる。「『穀梁』善於経。」、『穀梁』近孔子」
- 7 拙著『清初的群経辨偽学』（台北：文津出版社1990. 3）第二章第三節「新旧伝統競争中的回帰原典運動」を参照されたい。
- 8 高明「経学大義述」（『孔子月刊』23巻12期1995年8月）3-10頁。
- 9 陳栄捷『王陽明伝習録訳注集評』（台北：学生書局1983年）28頁。
- 10 詳細は陳徳述「儒家礼的現代管理功能」（『中華文化論壇』2001年2期、2001年4月）25-29頁参照。
- 11 これは宋人趙普の観点である。詳細は洪業「半部論語治天下辨」（『洪業論学集』台北：明文書局1982年7月所収）405-426頁参照。